山梨県鋳物師屋遺跡における縄文時代中期の植物圧痕

中山誠二（山梨県立博物館）
保阪太一（南アルプス市教育委員会）

はじめに

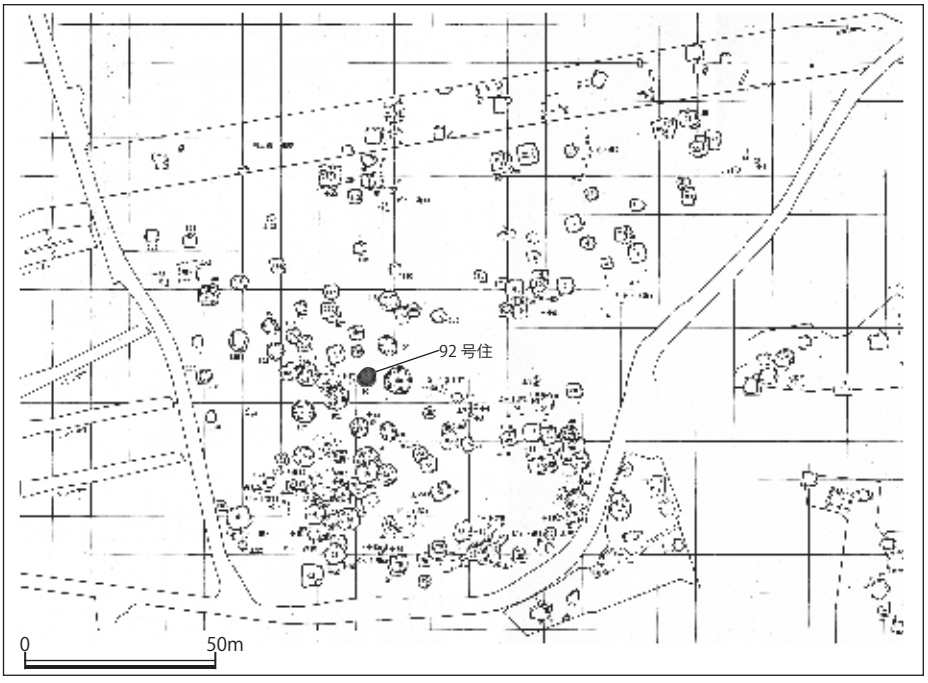
レプリカ法による植物圧痕の研究は、近年急速に全国に広がりを見せている（丑野・田川　1991）。筆者らがフィールドとする中部高地においても、縄文時代から弥生時代にかけての資料蓄積が進み、圧痕資料から植物利用を探る研究が進展してきている。特に、山梨県北部にある八ヶ岳や茅ヶ岳山麓地域では、縄文時代中期にダイズ属、アズキ亜属などの利用が広まっていた実態が徐々に明らかになってきている（中山 2010）。このようなマメ科植物の利用が、標高の低い同時期の甲府盆地においても認められるのか。また、他の植物利用の痕跡が認められるのか。そうした問題を明らかにするために、鋳物師屋遺跡の縄文時期中期の土器を対象に圧痕調査、分析を行った。本稿では、その結果を報告したい。

1　遺跡の概要と分析資料

鋳物師屋遺跡は、山梨県南アルプス市櫛形町下市之瀬地内の標高 280 ～ 290m の地点に所在する（櫛形町教育委員会　1995）。付近は、甲府盆地西側の櫛形山を水源とする諸河川と、その北側の御勅使川が形成した大扇状地とが一体になり、複合扇状地をなしている。遺跡は、この複合扇状地の南西端部で、漆川・市之瀬川が谷を降りきってつくる小扇状地状に位置する。

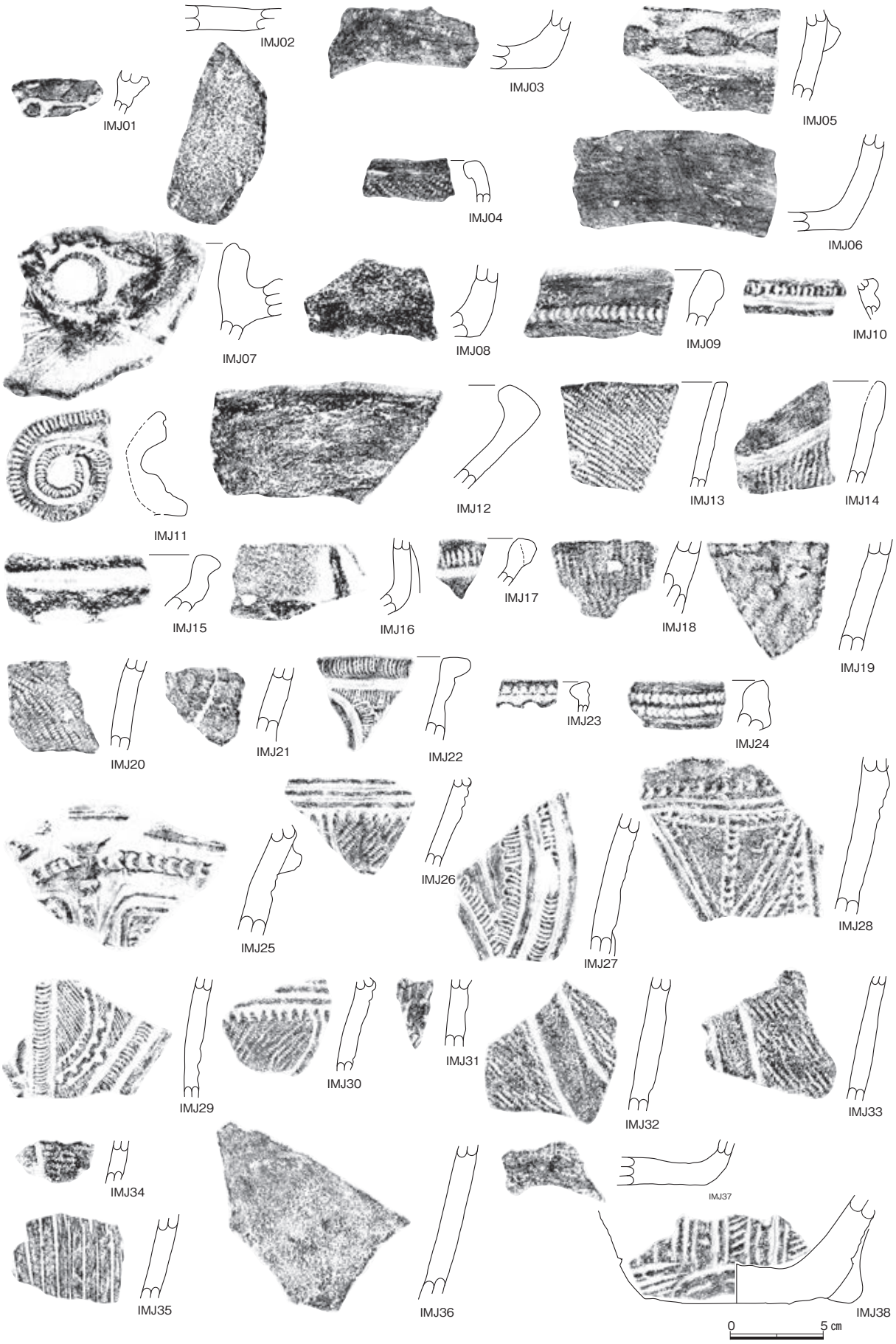
第１図　鋳物師屋遺跡の位置図

本遺跡及び隣接する〆木遺跡での調査の結果、縄文時代中期中葉の竪穴住居跡 32 軒、屋外埋甕５基、土坑 55 基、ピット群 17 ヶ所の他、162 軒の平安時代住居跡などが発見されている。縄文時代の集落は、直径 40m ほどの円形空間を挟んで東西に並ぶ住居跡群と土坑群によって構成される。集落の時期は、五領ヶ台式期～井戸尻式期にわたるが、五領ヶ台式及び井戸尻式期の住居跡は各１～２軒で、集落の主体は中期中葉の新道式～藤内式に形成されている。出土遺物の中には、ほぼ完全な形で出土した大形円錐形土偶、踊る人物像を描いた有孔鍔付土器、猿形土偶や棚畑型土偶頭部など注目される遺物が多く含まれている。本遺跡の縄文時代の遺物は、当時の信仰や精神世界を示す重要な資料として、国の重要文化財に指定されている。



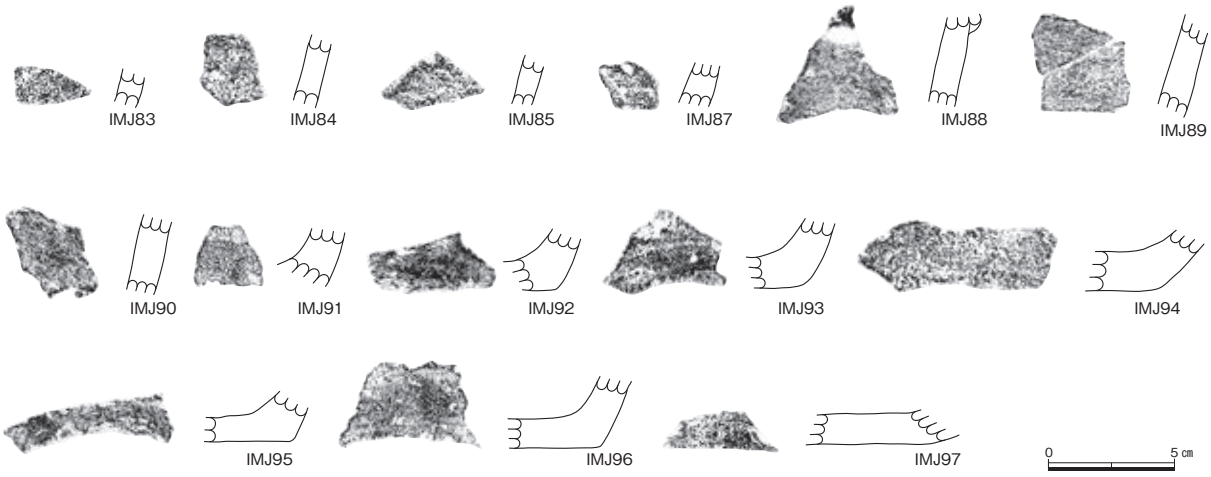
第2図　鋳物師屋遺跡全体図

今回、圧痕調査を行った資料は IMJ95 を除いてすべてが、92 号住居址から出土した藤内式を主体とする土器である（第３図～第５図）。この住居址は、遺跡の K-11



第３図　鋳物師屋遺跡圧痕土器１

第４図　鋳物師屋遺跡圧痕土器２



第５図　鋳物師屋遺跡圧痕土器３

区にあり、同時期の集落の西半部に位置する（第２図）。本住居址からは、総重量 70kgを超える土器片の出土が報告されている。今回の圧痕調査では、それらを含む 2,876 点を肉眼観察し、１次選考した 97 点のレプリカ分析について報告をする。

２　試料の分析方法

本調査では、縄文土器の表面に残された圧痕の凹部にシリコーン樹脂を流し込んで型取りし、そのレプリカを走査電子顕微鏡（SEM）で観察する「レプリカ法」と呼ばれる手法を用いる（丑野・田川　1991）。

作業は、①圧痕をもつ土器試料の選定、②土器の洗浄、③資料化のため写真撮影、④圧痕部分のマイクロスコープでの観察、⑤圧痕部分に離型剤を塗布し、シリコーン樹脂の充填、⑥これを乾燥させ、圧痕レプリカを土器から転写・離脱、⑦圧痕レプリカを走査電子顕微鏡用の試料台に載せて固定、⑧蒸着後、走査電子顕微鏡（日本 FEI 製 Quanta600）を用いて転写したレプリカ試料の表面観察、⑨現生試料との比較による植物の同定という手順で実施した。

なお、離型剤にはアクリル樹脂（パラロイドＢ－72）をアセトンで薄めた５％溶液を用い、印象剤には歯科用印象剤 JM シリコーンを使用した。

３　同定結果（表１、第６～８図）

IMJ06-2　（第６図１～４）

藤内式期の深鉢形土器底部で、内面に植物種子圧痕が確認された。

種子圧痕は、長さ 8.9㎜、幅 4.7㎜、現存厚 3.0㎜の扁平な楕円形を呈する。表皮は平滑で、一部が剥離し、しわ状となる部分が認められる。形状、大きさはダイズに類似するが、臍が未確認であるためマメ科（Fabaceae）とする。

IMJ11　（第６図５～８）

藤内式期の深鉢形土器把手で、把手部外面にある窪み部分に圧痕が確認された。

種子圧痕は、長さ 6.5㎜、幅 4.2㎜、厚さ 2.8㎜の扁平な楕円形を呈する。表皮は平滑であるが、一部凹凸が認められる。形状、大きさはダイズに類似するが、臍が未確認であるためマメ科（Fabaceae）とする。

IMJ18　（第６図９～16）

縄文を地文とする藤内式期の深鉢形土器胴部片で、外面に植物種子圧痕が確認された。

種子圧痕は、長さ 9.8㎜、幅 5.8㎜、厚さ 4.0㎜の扁平な楕円形を呈する。表皮は平滑で、臍と幼根部の盛り上がりが明瞭に認められる。臍は、長さ 3.8㎜、幅 1.4㎜の楕円形の臍縁で囲まれ、内部中央を縦方向に臍溝が走る。形状、大きさ、露出型の臍などから、ダイズ（*Glycine max* subsp. *max*）と判断される。

表１　鋳物師屋遺跡圧痕分析一覧

番号	試料名	時代	時期	型式名	遺構名	注記	部位	植物圧痕の有無	植物同定
1	IMJ01	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
2	IMJ02	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住21726	深鉢 底部	×	
3	IMJ03	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住21932	深鉢 底部	×	
4	IMJ04	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 口縁部	×	
5	IMJ05	縄文時代	中期中葉	井戸尻式	92号住居址	IM92住21844	深鉢 胴部	×	
6	IMJ06-1	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住21300	深鉢 底部	×	
7	IMJ06-2	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住21300	深鉢 底部	○	マメ科（Fabaceae）
8	IMJ07	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住21330	深鉢 口縁部	×	
9	IMJ08	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 底部	×	
10	IMJ09	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住21878	深鉢 口縁部	×	
11	IMJ10	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
12	IMJ11	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住19801	深鉢 把手部	○	マメ科（Fabaceae）
13	IMJ12	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住21611	深鉢 口縁部	×	
14	IMJ13-1	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住21855	深鉢 口縁部	×	
15	IMJ13-2	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住21855	深鉢 口縁部	×	
16	IMJ14	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住22234	深鉢 口縁部	×	
17	IMJ15	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住20649	深鉢 口縁部	×	
18	IMJ16	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住21270	深鉢 胴部	×	
19	IMJ17	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 口縁部	×	
20	IMJ18	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住19886	深鉢 胴部	○	ダイズ（*Glycine max* ）
21	IMJ19	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住19912	深鉢 胴部	○	木片
22	IMJ20	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住10833	深鉢 胴部	×	
23	IMJ21	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住21947	深鉢 胴部	×	
24	IMJ22	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住19821	深鉢 口縁部	×	
25	IMJ23-1	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 口縁部	×	
26	IMJ23-2	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 口縁部	○	ニワトコ (*Sambucus racemosa* L.)
27	IMJ24	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 口縁部	×	
28	IMJ25	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住19754	深鉢 胴部	×	
29	IMJ26	縄文時代	中期初頭	五領ヶ台式	93号住居址	IM93住22113	深鉢 胴部	○	不明種
30	IMJ27	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住21957	深鉢 胴部	×	
31	IMJ28	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住19765	深鉢 胴部	○	ダイズ（*Glycine max* ）
32	IMJ29	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住21881	深鉢 胴部	×	
33	IMJ30	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
34	IMJ31	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
35	IMJ32	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住22234	深鉢 胴部	×	
36	IMJ33	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住22234	深鉢 胴部	×	
37	IMJ34	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住22234	深鉢 胴部	×	
38	IMJ35	縄文時代	中期中葉	藤内式	93号住居址	IM93住21795	深鉢 胴部	×	
39	IMJ36	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住20635	深鉢 胴部	×	
40	IMJ37	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住21622	深鉢 底部	×	
41	IMJ38	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住22317	深鉢 底部	×	
42	IMJ39	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住19832	深鉢 胴部	×	
43	IMJ40	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住22234	深鉢 底部	×	
44	IMJ41	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住21894	深鉢 口縁部	×	
45	IMJ42	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住20584	深鉢 口縁部	○	マメ科（Fabaceae）
46	IMJ43	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住19936	深鉢 口縁部	×	
47	IMJ44	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住20560	深鉢 口縁部	×	
48	IMJ45	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住21879	深鉢 口縁部	×	
49	IMJ46	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住21916	深鉢 口縁部	×	
50	IMJ47	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 口縁部	×	
51	IMJ48	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 口縁部	○	不明種
52	IMJ49	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 口縁部	×	
53	IMJ50	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住21849	深鉢 胴部	×	
54	IMJ51	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住22234	深鉢 胴部	×	
55	IMJ52	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
56	IMJ53	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住19772	深鉢 胴部	×	
57	IMJ54	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住20555	深鉢 胴部	×	
58	IMJ55	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
59	IMJ56	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
60	IMJ57	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
61	IMJ58	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
62	IMJ59	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住20628	深鉢 胴部	×	
63	IMJ60	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	

番号	試料名	時代	時期	型式名	遺構名	注記	部位	植物圧痕の有無	植物同定
64	IMJ61	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住20527	深鉢 胴部	×	
65	IMJ62	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
66	IMJ63	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
67	IMJ64-1	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住19943	深鉢 胴部	×	
68	IMJ64-2	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住19943	深鉢 胴部	○	アズキ（*Vigna angularis* ）
69	IMJ65	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
70	IMJ66	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
71	IMJ67	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住20521	深鉢 胴部	○	マメ科（Fabaceae）
72	IMJ68	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
73	IMJ69	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住20645	深鉢 胴部	×	
74	IMJ70	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
75	IMJ71	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
76	IMJ72	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
77	IMJ73	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
78	IMJ74	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 口縁部	×	
79	IMJ75	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
80	IMJ76	縄文時代	中期中葉	藤内式	92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
81	IMJ77	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
82	IMJ78	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
83	IMJ79	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
84	IMJ80	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
85	IMJ81	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
86	IMJ82	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住21312	深鉢 胴部	×	
87	IMJ83	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
88	IMJ84	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
89	IMJ85	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
90	IMJ86	縄文時代	中期中葉		93号住居址		深鉢 胴部	×	
91	IMJ87	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
92	IMJ88	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	○	シソ属（*Perilla* sp.）
93	IMJ89	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住22240	深鉢 胴部	×	
94	IMJ90	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住22311	深鉢 胴部	○	シソ属（*Perilla* sp.）
95	IMJ91	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住	深鉢 胴部	×	
96	IMJ92	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住	深鉢 底部	○	不明種
97	IMJ93-1	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住19906	深鉢 底部	×	
98	IMJ93-2	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住19906	深鉢 底部	○	不明種
99	IMJ94	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住21038	深鉢 底部	○	マメ科（Fabaceae）
100	IMJ95	縄文時代	中期中葉		137号住居址	IM137住29370	深鉢 底部	×	
101	IMJ96	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住21306	深鉢 底部	×	
102	IMJ97	縄文時代	中期中葉		92号住居址	IM92住22209	深鉢 底部	×	

IMJ23 － 2 （第６図 17 ～ 20）

鋸歯状沈線を施す藤内式期の深鉢形土器口縁部片で、内面口唇に植物種子圧痕が確認された。

種子圧痕は、長さ 2.5㎜、幅 1.4㎜の扁平な楕円形を呈する。表皮は長軸に直交して、イボ状隆線で覆われる。形状、大きさ、表皮の特徴から、スイカズラ科のニワトコ（*Sambucus racemosa* L.）と判断した。

IMJ28 （第６図 21 ～ 24）

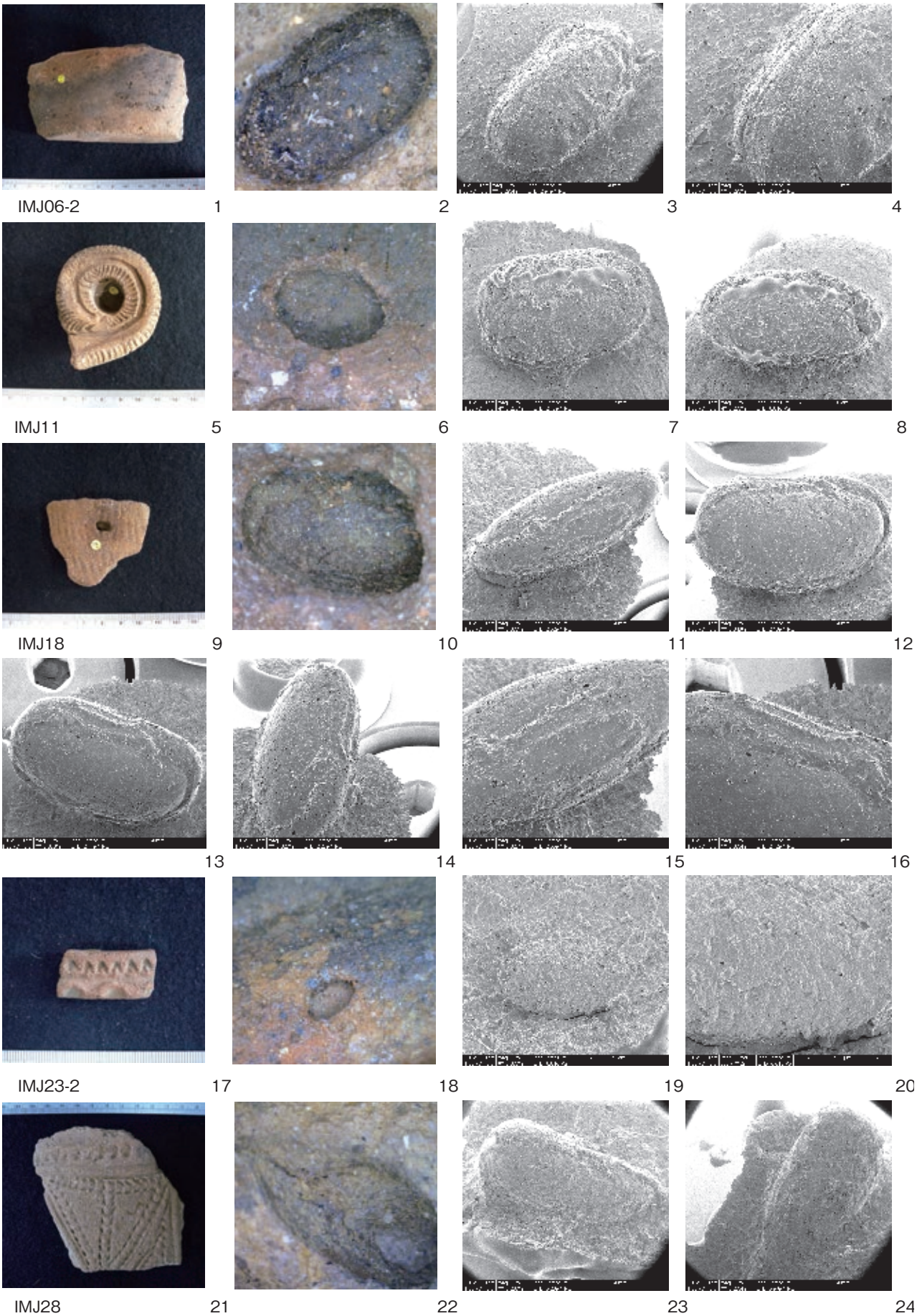
半截竹管の押し引きによる区画文を施す藤内式期の深鉢形土器胴部片で、断面に圧痕が確認された。

圧痕は、長さ 8.4㎜、幅 4.0㎜、厚さ 4.0㎜の扁平な楕円形を呈する。表皮は平滑で、臍と幼根部の盛り上がりが認められる。臍は、長さ 3.0㎜、幅 0.9㎜の楕円形で囲まれ、内部中央を縦方向に臍溝が走る。形状、大きさ、露出型の臍などから、ダイズ（*Glycine max* subsp. *max*）と判断される。

IMJ42 （第７図１～４）

刻みをもつ隆帯を施す藤内式期の深鉢形土器口縁部片で、断面に圧痕が確認された。

圧痕は、長さ 5.0㎜、幅 3.5㎜、厚さ 3.5㎜の両端部が平坦な俵形を呈する。小口面の形状は、曲線的な三角形をなす。表皮は平滑である。形状、大きさは、アズキに類似するが、臍構造が未確認のためマメ科（Fabaceae）とする。

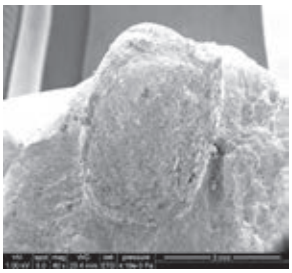
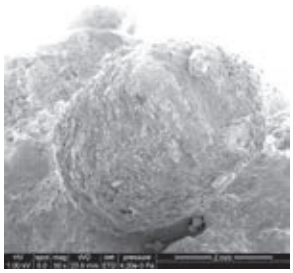


土器写真：1.9.17.21

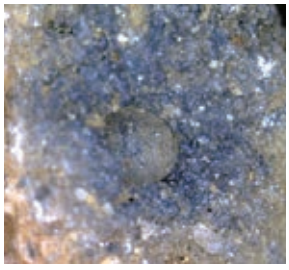
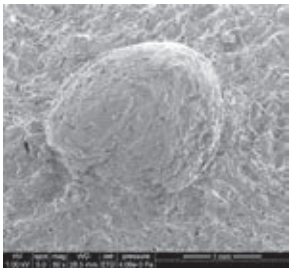
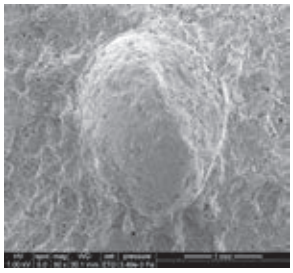
圧痕実体顕微鏡写真：2.6..10..18.22

圧痕 SEM 画像：3.4.7.8.11～16.19.20.23.24

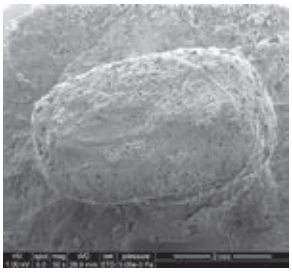
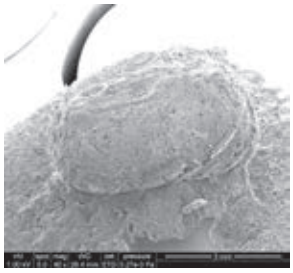
第６図　鋳物師屋遺跡土器圧痕１

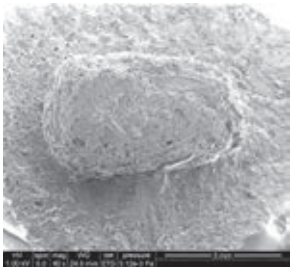
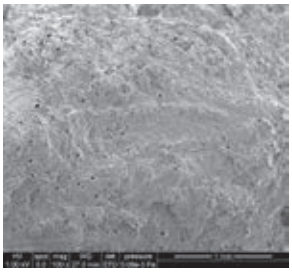
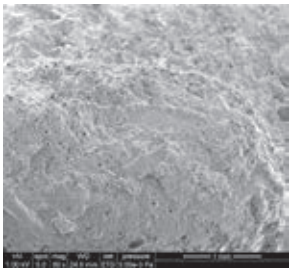
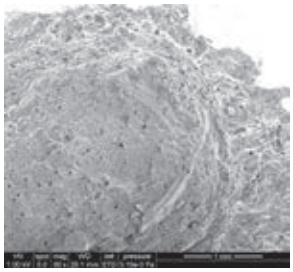
IMJ42 1 2 3 4

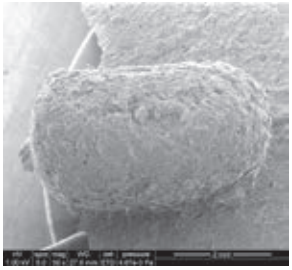
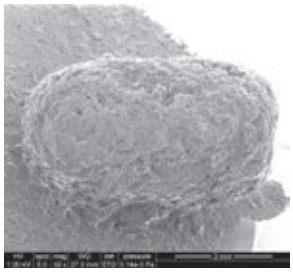
IMJ48 5 6 7 8

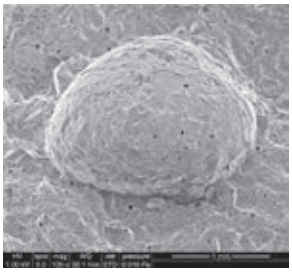
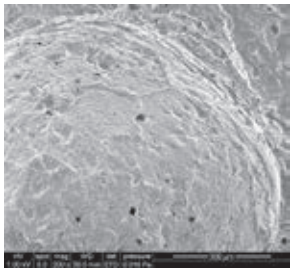
IMJ64-2 9 10 11 12

13 14 15 16

IMJ67 17 18 19 20

IMJ88 21 22 23 24

土器写真：1.5.9.17.21

圧痕実体顕微鏡写真：2.6..10..18.22

圧痕 SEM 画像：3.4.7.8.11～16.19.20.23.24

第７図　鋳物師屋遺跡土器圧痕２

IMJ48 （第７図５～８）

無文の口縁部片で、断面に圧痕が確認された。

圧痕は、長さ 2.2㎜、幅 2.1㎜、厚さ 1.8㎜の扁平な円形を呈する。表皮は平滑で、中央部が大きく窪む。同定の鍵となる特徴が認められず不明種とした。

IMJ64-2 （第７図９～ 16）

口縁内部がやや内屈する無文の深鉢形土器口縁部片で、外面に種子圧痕が確認された。

種子圧痕は、長さ 5.0㎜、幅 3.1㎜、厚さ 3.2㎜の端部が平坦な俵形を呈する。中央から端部に偏って臍と種瘤が認められる。臍は、長さ 1.6㎜、幅 0.6㎜の舟底状となり、臍溝は認められない。表皮は平滑である。形状、大きさ、被膜型の臍構造から、アズキ（*Vigna angularis*）と判断される。

IMJ67 （第７図 17 ～ 20）

半截竹管による隆帯区画の内部を三叉状沈線、並行沈線で充填する藤内式期の深鉢形土器胴部片で、内面に圧痕が確認された。

圧痕は、長さ 5.1㎜、幅 3.0㎜、厚さ 3.0㎜の両端部がやや平坦な俵形を呈する。表皮は平滑である。形状、大きさは、アズキに類似するが、臍構造が未確認のためマメ科（Fabaceae）とする。

IMJ88 （第７図 21 ～ 24）

無文の土器胴部片で、内面に圧痕が確認された。

種子圧痕は、長さ 2.2㎜、幅 2.0㎜、厚さ 1.7㎜で、平面形は基部がやや細い円形で、側面は基部がやや細く、イチジク状をなす。不整六角形の網状隆線が外皮全体を覆う。大きさ、形態や表皮の特徴からシソ属（*Perilla* sp.）と判断される。

IMJ90 （第８図１～７）

無文の土器胴部片で、断面に圧痕が確認された。

種子圧痕は、長さ 2.1㎜、幅 2.1㎜、厚さ 1.8㎜で、平面はほぼ円形で、側面基部がやや細いイチジク状を呈する。不整六角形の網状隆線が外皮全体を覆い、臍（着点）の一部が観察される。大きさ、形態や表皮の特徴からシソ属（*Perilla* sp.）と判断される。

IMJ92 （第８図８～ 11）

無文の土器底部片で、外面に圧痕が確認された。

圧痕は、長さ 2.6㎜、幅 2.2㎜で、側面基部がやや細いイチジク状を呈する。表皮は全体的に凹凸が認められる。同定の鍵となる特徴が認められず不明種とした。

IMJ92 （第８図 12 ～ 15）

無文の土器底部片で、外面に圧痕が確認された。

圧痕は、長さ 2.5㎜、幅 2.3㎜、厚さ 2.1㎜で、側面基部がやや細いイチジク状を呈する。表皮は若干の凹凸が認められる。同定の鍵となる特徴が認められず不明種とした。

IMJ94 （第８図 16 ～ 19）

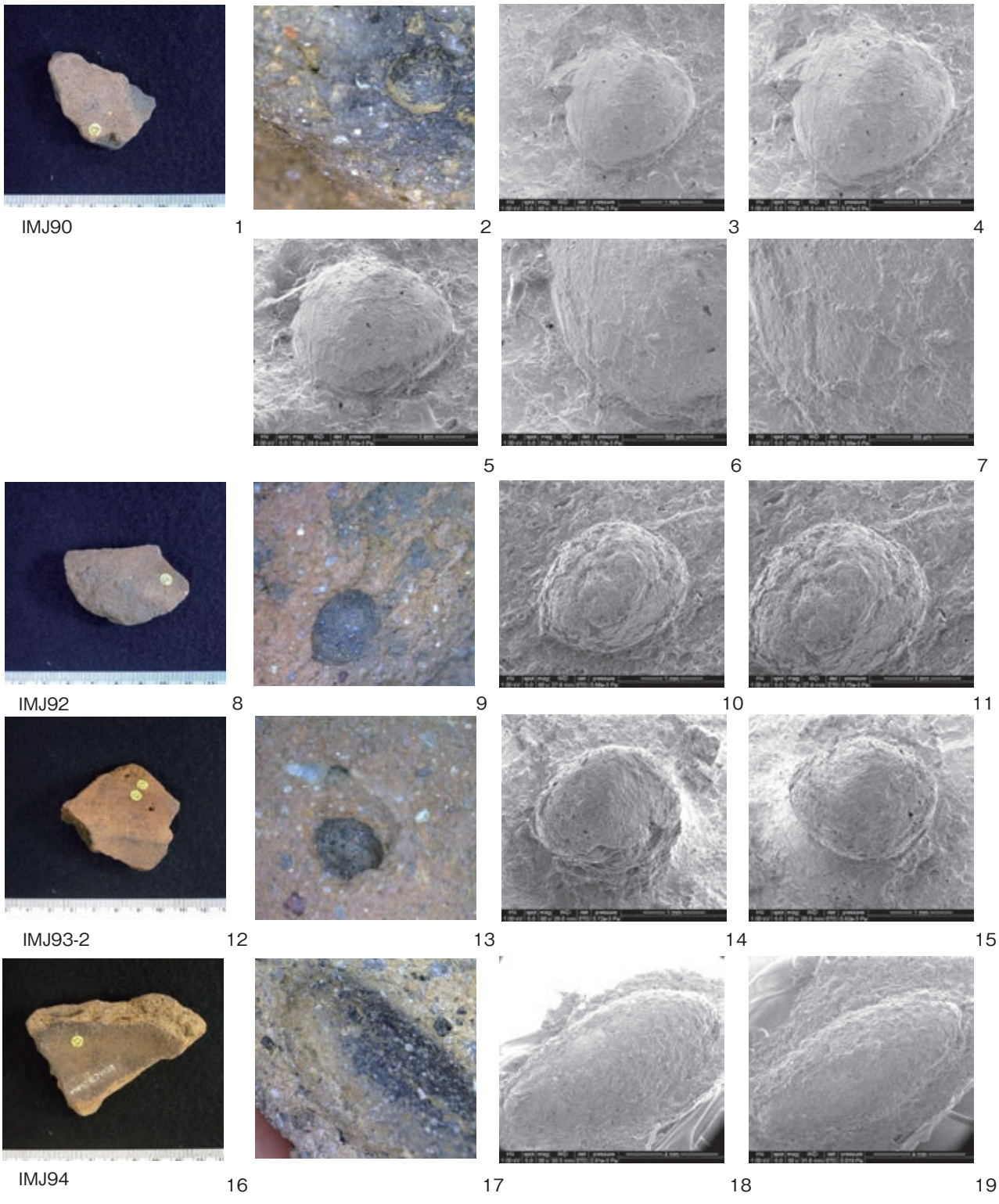
深鉢形土器底部片で、内面に圧痕が確認された。

圧痕は、長さ 10.1㎜、幅 4.5㎜、厚さ 3.8㎜の扁平な楕円形を呈する。表皮は平滑であるが、一部凹凸が認められる。形状、大きさはダイズに類似するが、臍が未確認であるためマメ科（Fabaceae）とする。

４　小結

鋳物師屋遺跡の圧痕土器は、概ね縄文時代中期中葉の藤内式に比定される土器群である。圧痕分析の結果、マメ科（Fabaceae）５点、ダイズ（*Glycine max* subsp. *max*）２点、アズキ（*Vigna angularis*）１点、シソ属（*Perilla* sp.）２点、ニワトコ（*Sambucus racemosa* L.）１点、不明種４点が確認された。マメ科とした試料には、ダイズおよびアズキに類似した２種類の形状のものがある。

本県の圧痕調査では、これまで八ヶ岳山麓から七里ヶ岩の台地上と茅ヶ岳山麓地域の標高 500 ～ 1000m



土器写真：1.8.12.16
圧痕実体顕微鏡写真：2.9.13.17
圧痕 SEM 画像：3～7.10.11.14.15.18.19

第８図　鋳物師屋遺跡土器圧痕３

の地域でダイズが多く確認されてきたが、本遺跡の事例はそれらの高標高地域以外では初めての検出例となる。つまり、縄文時代中期中葉（約 5000 年前）には、甲府盆地内においてもダイズ属、アズキ亜属のマメ科の利用が広がっていた状況が理解できる。

ダイズの計測値は、IMJ18 で長さ 9.8㎜、幅 5.8㎜、厚さ 4.0㎜、IMJ28 で長さ 8.4㎜、幅 4.0㎜、厚さ 4.0㎜で、野生ツルマメ（*Glycine max* subsp. *soja*）より大形の種実である。筆者はこれらの小形扁平型の形態を「栽培

化初期段階のダイズ」と呼んでいるが（中山　2009、2010）、同時期の八ヶ岳山麓や茅ヶ岳山麓の資料と比較しても、ほぼ同様の形態と大きさを示す。

アズキ亜属の種実炭化物は、県内においても甲府市上の平遺跡（笠原･藤沢　1986）、大月市大月遺跡（松谷　1997）、都留市中谷遺跡（松谷　1996）などで出土しているが、圧痕調査においても釈迦堂遺跡、一の沢遺跡などで[1)]確認されてきており、広範囲に安定的に利用されていた状況が窺える。

シソ属は、山梨県では縄文時代前期前葉期中越式の土器以降、前期後半の諸磯式期にも検出例が多い。鋳物師屋遺跡の事例は、中期でもエゴマなどのシソ属は重要な存在であったと考えられる。エゴマは、種実内に脂質分が多く含まれ、食用の他にも、灯用や漆の混和剤などの油として多様な利用形態が想定される。

ニワトコは、圧痕の事例としては山梨県で初例である。青森県三内丸山遺跡第６鉄塔地区で縄文時代前期のニワトコ属果実の集積部が検出され、果実の直接食用または果汁をしぼって利用したことが推定されている（辻圭・辻誠・南木　2006）。また、三内丸山遺跡の出土例では、ニワトコを用いた醸造の可能性も指摘されている（辻　2005）。鋳物師屋遺跡でのニワトコの種実圧痕の検出は、同様の利用を示すものとして注目しておく必要があろう。

鋳物師屋遺跡の圧痕調査から、縄文時代中期中葉の植物利用の一端が明らかになった。土器圧痕として残される植物は、遺跡から出土した炭化植物遺存体などと比較しても、ある特定の植物に集中する傾向がある。その偏重傾向は、貴重な食料源となる植物の保存施設周辺での土器製作を示すのか、あるいは特定植物を選択的に土器の中に混入させているのかについては、議論の分かれるところである。しかしながら、そうした植物が縄文人の身近にあり、生活の中でも欠かせない存在であったことは揺るぎの無い事実であろう。今後は、植物遺存体などの定量的な検出状況も比較検討し、より詳細な植物利用の実態を描き出していく必要がある。

なお、本稿は、山梨県立博物館研究紀要第８集（2014）に掲載したものである。

註

１　一の沢遺跡、釈迦堂遺跡のアズキ亜属圧痕については、中山の一連の調査の中で確認されており、現在、調査報告書を作成中である。

引用文献

丑野毅・田川裕美　1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24　pp.13-35　日本文化財科学会
笠原安夫・藤沢浅　1986「上の平遺跡住居址から出土した炭化種子の同定」『研究紀要』3　pp.69-79　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
櫛形町教育委員会　1995『鋳物師屋遺跡』　櫛形町文化財調査報告書７
辻誠一郎 2005「縄文時代における果実酒酒造の可能性」酒史研究 22　pp.21-28　日本酒造史学会
辻圭子・辻誠一郎・南木睦彦　2006「青森県三内丸山遺跡の縄文時代前期から中期の種実遺体群と植物利用」『植生史研究』特別第２号　pp.101-120 日本植生史学会
中山誠二　2009 「縄文時代のダイズ属の利用と栽培に関する植物考古学的研究」『古代文化』61-3　pp.40-59　古代学協会
中山誠二　2010『植物考古学と日本の農耕の起源』　同成社
比佐陽一郎・片多雅樹　2006『土器圧痕のレプリカ法による転写作業（試作版）』　福岡市埋蔵文化財センター
松谷暁子　1996「中谷遺跡出土炭化種子について」『中谷遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 116 集　pp.177-179　山梨県教育委員会
松谷暁子　1997「大月遺跡から出土した炭化植物について」『大月遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 139 集　pp.115-117　山梨県教育委員会